

仏の願い

平成21年 西雲寺だより 春号(11号)



前住職 善勝院釋一彦

十七回忌法要のご案内

5月16日(土)午前10時より

法話 大野 専福寺様

法要後おときを用意いたします

お誘い合わせ多数ご参詣下さいますようご案内致します

前住職は、明治四十二年一月六日生まれで、平成五年四月十日に八十五歳で往生いたしました。明治・大正・昭和・平成と日本の四つの激動の時代を、お同行の皆様と共に生きさせていただきました。

その中で、昭和二年二月九日に大雪のため庫裏が崩壊し、両親と四人の弟妹を亡くすという悲惨な目にあっております。また太平洋戦争には兵役にとられ、祖父に寺を託すというつらい思いもいたしました。

戦後は、昭和三十七年に親鸞聖人七〇〇回大遠忌をつとめ、また台所や庫裏の建て替え等、当院の護持発展に尽くされました。八十五歳という長い生涯を寺一筋に歩み、お同行の皆様には大変お世話になりました。

前住職の苦勞を偲ぶと共に、お念仏相続の思いを新たにいたしたいと存じます。どうぞお誘い合わせお参り下さい。

親鸞聖人のご生涯(ご流罪)

浄土宗の独立

法然上人の明らかにされた、善人も悪人も「ただ念仏一つ」で救われるという専修念仏のみ教えは、教えの分かり易さと法然上人の情熱及びその円満な人柄によつて、いつしか数多くの人たちに感化を与えていくことになりました。仏法とは無縁のものとされていた庶民をはじめ、僧や貴族、武士などがともに一つの念仏に和す僧伽(サンガ)が出現していたのです。お念仏のみ教えはインド、中国、日本と伝来し、法然上人以前にも説かれていましたが、それは各宗派の教義の一部分として説かれ、それは母屋のひさしを借りるような状態でした。実際法然上人や親鸞聖人が若い日修行に励んだ比叡山においては、朝に題目、夕に念仏といわれましたが、それはお浄土や仏さまを思いつかべる観想や観念の念仏でした。念仏はどこまでも各宗派に宿を借りた状態で、これを寓宗(ぐうしゅう)といえます。

しかし法然上人は「選択集」において浄土宗の独立を宣言され、その中で

それ速(すみ)やかに生死を離れんと欲わば、二種の勝法(しょうぼう)の中、しばらく聖道門をさしおきて選びて浄土門に入れ。

浄土門に入らんと欲わば、正雑(しょうぞう)二行の中に、しばらくもろもろの雑行(ぞうぎょう)を抛(なげう)ちて、選びて正行(しょうぎょう)に帰すべし。

と示されたのです。すなわち仏教を自力聖道(しょうどう)門と他力浄土門に分けられ、末法五濁の世にあつては自力聖道門では救われまいとして他力浄土門を選びとられました。そして浄土門においてもお念仏を正行として、他の行を我執で汚された雑行として切り捨てられたのです。ここに専修念仏の教えは法然上人において、当時あつた八宗から独立して浄土宗として歩みはじめたのです。

比叡山の警告と七ヶ条制誡(せいかい)

親鸞聖人の吉水でのひたむきの求法研鑽とは反対に、このころの世情は騒然としてきました。平家を滅ぼして鎌倉に開かれた幕府では、頼朝の急死によつて早くも内紛が始まつていました。一方京都では法然上人の浄土宗の独立によつて、いよいよお念仏が盛んになるにつれて、み教えを曲解し「淫・酒・食肉」をいたずらに勧める者や、お念仏さえ称えれば何をしてもよいという「造悪無碍(ぞうあくむげ)」の者までも現れ、社会を乱すこともなつていきました。このような状況のなか、親鸞聖人三十二歳の冬、専修(せんじゆ)念仏の広がりと、法然上人の名声をねたむ南都、北嶺の伝統教団のうち、まず北嶺の比叡山が「専修念仏に名をかり、本願に事をよせて放逸のわざをなすもの多かりけり」と法然上人とその門弟たちの行動がもはや黙視できないとして、法然上人の吉水教団に対して厳しい警告を送ってきたのでした。当時の比叡山は武装した僧兵たちをかかえ、後日河法皇をして「鴨河の水、双六の賽(さい)、山法師」の三つだ

けは自分の意のままにならぬと歎かせたほど権力をもつていたのです。その気になれば吉水の草庵を打ち壊すことぐらい簡単なことだったのでしよう。警告を受けるや法然上人はすぐさま門弟たちに自重を促し、七箇条からなる禁止事項を示した「七箇条の制誡」を提示し、更に門弟たちに署名を求め、総勢百八十九人の門弟が署名して、天台座主に提出されました。親鸞聖人も「僧綽空(しゃくくう)」の名で八十六番目に署名をしていきます。この法然上人の対応に対して、時の関白で法然上人に帰依していた九条兼実(かねざね)の働きかけと庇護もあり、比叡山は一応は納得し、吉水教団は事なきを得ることになったのです。

興福寺奏状(こうふくじそうじょう)

比叡山の弾圧が落ちついたのもつかの間、今度は南都、奈良の伝統仏教の一大勢力である興福寺もまた法然上人の専修念仏に対して、まことに厳しい批判を展開してきました。比叡山による警告のあつた翌年(元久二年の秋)ちようど親鸞聖人が法然上人から「選択集」の書写を許され、さらに上人の肖像を写し終わつていた頃のことですが、興福寺の学僧・解脱房貞慶(げだつぼうじようけい)が筆を執つて九ヶ条に及ぶ問題をあげて、専修念仏の禁止と法然上人をはじめとす



る専修念仏の中心人物の処罰を朝廷に訴え出たのです。この告発状が「興福寺奏状」と呼ばれるもので、また伝統教団の総意であるという意味で「八宗同心の訴訟」ともいわれています。「興福寺奏状」が指摘している九つの過失は次の通りです。

- 第一、新宗を立つる失
- 第二、新像を図する失
- 第三、釈尊を軽んずる失
- 第四、万善を妨げる失
- 第五、霊神に背く失
- 第六、浄土に暗き失
- 第七、念仏を誤る失
- 第八、釈衆を損ずる失
- 第九、国土を乱る失

この奏状の内容をみますと、当時の伝統教団は国家と一体であったのです。一宗を開くには朝廷の勅許（天皇の許可）が必要であり、法然上人の浄土宗は勅許を得ずに開宗していると批判しているのです。また最後の「国土を乱る失」に見られるように、もし法然上人の専修念仏の主張を許すならば当時の仏教界全体と国家の体制を認めようとするものであるから、国家の存立そのものが脅かされると主張しているのです。「興福寺奏状」が提出された二ヶ月後の元久二年十二月、朝廷は専修念仏の遍執は禁ずるが罪科には処されないとの宣旨を下しましたが、興福寺は納得せず、再度の強訴によって法然上人はやむなくお弟子の行空を破門してひとまず落ち着きを見せたのでした。

無実の風聞

専修念仏の禁断をめぐる慌しい動きが続く中、都にある風聞が流れ事態は急変します。当時阿弥陀信仰が盛んになると、熊野が弥陀や観音の補陀落（ふだらく）浄土と信じられ、熊野参詣が流行し、天皇をはじめ上皇や庶民に至るまで数多くの人が参詣するようになったのです。宣旨が下された翌年の元久三年、後鳥羽上皇が熊野行幸（ぎょうこう）に旅立たれます。その留守中に事件は起きました。上皇の寵愛を受ける松虫、鈴虫の二人の女官が夜ひそかに宮中をぬけ出し、法然上人のお弟子の安楽房と住蓮房が東山の鹿ヶ谷で開く別時念仏会に参詣し、世をはかなんで出家してしまつたというのです。別時念仏とは善導大師の表された往生礼讃（らいさん）を昼夜六時（晨朝（じんちょう）、日中、日没、初夜、中夜、後夜）に分けて節をつけて唱えるものですが、住蓮、安楽は特に美声の持ち主で、その唱える念仏は有難かつたといわれています。この事が後鳥羽上皇の逆鱗にふれ状況が一変してしまふのです。

承元（じょうげん）の法難

この事件が直接の原因となり、翌年の承元元年二月ついに興福寺奏状が取り上げられ、法然上人をはじめ吉水教団の門弟たちに厳しい処罪が下され、専修念仏停止（ちようち）の宣旨が下されたのです。そして住蓮房と安楽房以下四人に死罪の処罰が下され六条河原で斬首、法然上人、親鸞聖人以下八人に遠流の処罰が下されたのです。これが「承元の法難」といわれる念仏弾圧であります。

当時は出家を罰する場合、ひと度還俗させて処罰が行われたことから、七十五歳の法然上人は藤井元彦という俗名を与えられ、土佐国（高知県）に、三十五歳の親鸞聖人は藤井善信の俗名を与えられ、越後国（新潟県）に流されることになったのです。流罪には京都からの距離によって、遠流、中流、近流の三通りがあり、遠流は極刑、大よそ千里以上の地であつたそうです。親鸞聖人ははじめ死罪の宣告を受けたが、九条兼実のはからいにより罪を軽減させられ流罪になったと伝えられています。四人の僧侶の首を撥ね、八人を流罪にするという「承元の法難」は日本の精神史の上において、これほどひどい弾圧は例をみないのです。

この法難に対して親鸞聖人は、後になつてその名著「教行信証」の後序に激しい憤りをこめながらも淡々と記しておられます。竊（ひそ）かに以（おも）んみれば、聖道の諸教は久しく廃れ、浄土の真宗は証道いま盛なり、しかるに諸寺の釈門、教に昏（くら）くして真仮の門戸を知らず、洛都の儒林、行に迷うて邪正の道路を弁（わきま）つることなし

このような悲しい出来事が起こるのは、聖道門の人たちが、この末法の世においてその教えが「すでに時を失し機に乖（そむ）ける」という事実は無目覚であり、当時の学者や文化人が真実の教えが何であるか分からず右往左往しているからだその原因をえぐり出し深く悲歎しておられるのであります。（住職）

法事をつとめて

未定 重臣(82歳)

福井市春山出身 川崎市在住

三十三回忌

昨年十月、母「さを」の三十三回忌と父「静馬」の年忌を、福井春山の両親の住んでいたままの拙宅に西雲寺の御前をお招きして供養させて頂きました。我々縁者一族、大勢が久し振りに集まって、故人を偲ぶと共に、皆も楽しく賑やかに御互いの絆の深さを確かめ合う、極めて有意義な一日となりました。

これも仏縁に繋がる御陰と深く感謝するとともに、改めて我々の生活の中にある御寺さまを中心とした諸行事の意味、大切さを再認識した次第です。

ただ三部経の読経を頂きながら、我々の宗旨を超えて日本の在来仏教全体の在り方と若い世代への未来志向とを如何に結びつけていくのが、これからの宗門に課せられた命題の一つのような気がしました。難解な漢語が多い仏典ですが、その思

想や教えは現代に生き返り、我々衆生の救いになると信じております。

帰敬式

法事を機におかみそり(帰敬式)をお受け致しました。法名を我々夫婦二人授けて頂き、今日からは仏弟子として更に信仰に励む事を、仏前でお誓いした次第です。子供や孫達にもおかみそりの意義を説明して、法名はあの世への旅立ちのためのパス・ポートではなく、又死後仏弟子になるよりも、生前に頂く事の大事さを話した次第です。若い世代に葬式仏教と誤解されるのが一番つらい事です。最近の荒廃した世相を見るにつけ、日常生活の中に仏の心、信心を育んで、もう少し文化的にも精神的にも心豊かな毎日を送らせて頂きたいものと念ずる次第です。

宗教あれこれ

筆者はタイ国にながらくおりましたが、タイの人々の宗教心の厚さとワット(寺院)との交流の深さに驚きました。短絡して敢えて申し上げ

ると、お釈迦様は人をみて法を説かれた様で、北方民族系(中国など)には大乘仏教を、南方(セイロン、ビルマ、タイ、ベトナム等)の人々には戒律重視の小乗仏教(この分型にも問題ありますが・・)を説かれ、仏教が深く一般大衆の生活の中に溶け込んできているさまに感銘いたしました。

イスラム教もまた中近東諸国、その他インドネシアなど幅広く信仰されていますが、一例をあげると、乞食などにお金を施したとき御礼を言うのは施したほうで、金持ちが貧者に施す機会を与えられた事を神に感謝するのがシャリア・アクトの精神だそうです。筆者はながらく中近東でも仕事をしましたが、宗教革命も文芸復興も産業革命も経ぬまま中世期から現世紀に突入したようなアラブの国々では、まだイスラム教が脈々と人々の中に生きています。刑罰、断食、その他極めて厳しい戒律と教義ですので、ノンポリ日本では想像が出来ないと思います。

以上、法事をつとめて若干の感想を述べさせて頂きました。

幸せとは

匿名希望さんより（女性・81歳）

子どもの頃、じいちゃんが、年寄りになると日が立つのが早い早いと、口癖のように言っていたのを今でもよく覚えています。私もその年になって、よく気持ちがあがって来ました。長いとも思わず過ごしてきた八十年、喜怒哀楽いろんな事があり、人様に話されること又恥ずかしくて話せないこと、大きな坂もありました。

ご先祖様ごめんなさい。愚かな私たちをお許し下さい。毎日暗い日が続きました。愚痴怒りが頭の中をかけ廻って、嫌になってきました。何時までもこんな日を送っていたら体も変になってしまふと思ひ、何とか逃げ出さなくてはという気持ちになりました。その時、頭に浮かんだのが仏さまでした。あそつだ、私は仏さまの子供なんだ、と気がついた時、自然と明るく嬉しくなってきました。

した。今までのくるしみも忘れるようになりまして。もっと早く気がつけばこんなに苦しまなくてもよかったの後悔しました。静かに考えているうちに、幸せということに気づきました。今まで全然気づかず思いちがいをしていた事、本当に恥ずかしいです。ずっと向こうの方においていた幸せを、今しみじみ味わうことが出来て嬉しいです。

又自分を振り返る事も出来ました。何事も自分という事に気がつけば争いにならないという事も勉強出来ました。長いことの苦のお陰で明るく有難い気持ちにかわることが出来ました。仏さまの子供である私、もう二度と心配をかけてはいけなと思います。

仏さまの子供と分かり、ずっと向こうにおいてあった幸せに今あえた喜びをかみしめて、一日一日を大事に精進していこうと思います。

中高生からの「素朴な疑問」のコーナー 第3回

死んだあの人は今どこに？

私が亡くなった方の家を訪ねてお参りをする時間は、遅くとも夕食の前後までです。その後から、夜の闇はやってきます。いくら日を重ねても、あの人への思いは消えたりしないよ、増すばかりだよと言われてます。返事のない写真に向かって、人知れず、一日なんべんも涙を流してしまうと言われます。

悲しみは、こころの中に大きな空洞を開くのです。耐えがたい空洞をです。ましてや静かな夜にはつらいのです。誰もこのつらさは分からないだろうというくらい。

でも、不思議なことに空洞は、他の空洞と深く響き合うのです。他の人と悲しみの底で通じ合うのです。なくもできません。悲しみが無くなるわけでもありません。無力以外の何ものでもありません。でもその無力なもの同士の間は、不思議なことに、広がるのです。あの人もそうだったか、あの人もそうだったかと、無限大に。

空洞をふさいでしまつては響き合えないのですが、空洞のまま保つのはとても困難なことです。

私は、悲しみの空洞と向き合う方法を知りません。日々の忙しさをわざと求めるだけでしよう。寿命やつたんやと、無理やり自分に言い聞かせるだけでしよう。魂が漂っているかと探してみたり、死んだ人は、風に、仏になるらしいと思いつつ、思えずに心を病むかも知れません。いや、死んだら終わりや、ただ水と二酸化炭素になるんや、こんな風に悲しみを見下すかも知れません。

本当にありがたいのは、どう向き合えばいいか、導いて下さる先輩がたに出会えたことです。教祖や教団ありきではありません。田舎のおじい、おばあ、おんさん、おばさん方なのです。名は知れずとも尊い方々なのです。

感動するのは、例えば「おとつあん、めくんだったか（参りなさったか）」という挨拶です。お浄土に参るべき人として日頃から受け止めておられる表れです。突然死の縁がやってきてもそう挨拶するのです。例えば「色のうすいお赤飯」です。お通夜の晩みんなでお敬いするのです。たとえ死に方がどうであれ、ありがとうありがとうと手を合わせて拝むのです。

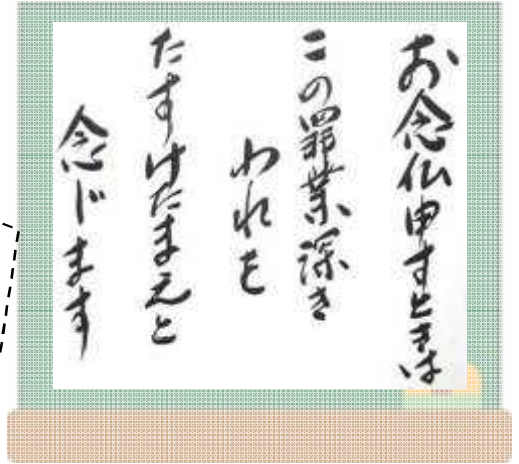
その先輩方同士は、悲しみを共有しておられるのです。そして、私もまた、無力そのまま仲間に入れていただくのです。

その背後に思いをこらすと、やつと名の知れた先輩方が透けて見えてきます。例えばお釈迦さまは「死んだあの人は今どこに？」という質問にお答えなさりませんでした。その質問は方向が違うよ、どこだと外を探すんじゃないよ、あなたがどう受け止めていくのか、それが大切な大切な宿題なんだよ、そう教えて下さいました。

空洞は一人では受け止め切れませんが、その宿題と向き合つて来られた方々と響き合いながら導かれていくしかないと思います。大切な宿題を与えて下さったこと、思いもよらぬ不思議な広がりを見せて下さったこと、何よりもこの私が無力だと知らされたこと、それらはすべて今は亡きあの人のたらきだと受け止められないでしょうか。するとあの人は今ここにはたらいておられるのです。目には見えずとも、確かに、確かに。

（编者）

山門掲示板



私たちは朝夕お内仏にお参りするときにごのようなところでお念仏申しているでしょうか。「朝に礼拝・夕に感謝」ということばかりですが、朝には今日一日どうか無事でありますようにと手を合わせ、夕には今日一日無事でありがとうございましてとお念仏申すのでしようか。

しかし、これでは不幸を恐れ、幸せを願う身勝手な欲求を仏さまにしているのではありませんか。如来さまは私たちに「迷いの衆生よ、われをたのんでどうか助かってくれ」と呼びかけて下さっているのです。それが南無阿弥陀仏です。その呼びかけに応じたのが「たすけたまえ」です。これは私の欲求ではありません。魂の底から出た宗教的欲求です。(住職)

先輩の感動をたずねて

今朝のことです。お内仏で5年生の娘が「なんまん」と消え入るような声で合掌しました。もう無邪気にお念仏する歳ではないようです。

「ラクやなあ真宗は。なんまんだぶつって称えるだけがいいんやで」ってよく言われますね。ふふふそれどころか正信偈さんは「なんまんだぶつを聞く」って歌っておられるんですよ。えーうっそーほんならもつとラクやん！もつと早よゆうてやん…と、私なら思います。

でもね、耳を澄ませても聞こえないですよ。誰かがなんまんだぶつってほめ称(たた)えないと。誰かがなんまんだぶつって愚か者の告白をしないと。

ホント、知りませんでした。念仏を称(とな)えるのも聞くのも、全部自分でできると思っていました。ラクラクとできるものだと。実は称(とな)えるも聞くも、いただきもの「だ」だと知ったとき、初めて大きな大きな大きな救いにあずかるのです。

消え入るような称名(しょうみやう)、形だけの(形さ)えあやしい(念)仏、確かに聞きました。娘よ、その背後の先輩方よ、ありがとうございます。そして私も、なんまん…」

(编者)

重誓名 声聞十方

親鸞作『正信念仏偈』より

じゅうせいみみょうしやうもんじつぽう

読み方 (法蔵菩薩が)重

て誓うらくは、名

方(に)聞こえんと。

名(な)声(こゑ)なむあみだぶつ。

十方(じふたう)すべ(す)ての方(かた)。私(わが)に

まで。

行事予定

平成21年度

6月中旬 本山差し向け布教

14、15日 西雲寺

16日 安田地区(お宿・末定清二さん宅)

17日 本堂地区(お宿・横山忍さん宅)

布教使 滋賀 田中美知男師

6月28日(日) 門徒研修会

あわらし市笹岡・称運寺にて

講師 高史明(コサミョン)師

7月10 11日 永代経

11日はバスが3台出ます。

おときがあります。どうぞお参り下さい。

10月17 18 19日 報恩講

18日はバスが3台出ます。

おときがあります。どうぞお参り下さい。

11月28 29 30日 御正忌報恩講

29日はおときがふるまわれます。

12月31日 除夜の鐘(どなたでもどうぞ)

1月1日 お正月

午前6時、本堂で晨朝(じんちょう)

午前7時、納骨堂で晨朝

1月1、3日 お年頭

3月 春分の日 世話方集会

世話方集会のご報告

(3月20日)

在所の代表者(世話方)の皆さんに集まっていたいただき、昨年度の総括と今年度のかじ取りをしていただきました。また、本堂の御内陣の傷み具合を、実際に目で見ていただきました。

親鸞聖人の750回大遠忌が近づいてまいりました。2年後の5月には、本山に於いて10日間にわたる大遠忌法要が執り行われます。私たち一人一人が、親鸞聖人を宗祖として出遇わせていただくことができますよう、聞法させていただきましよう。

表紙にご案内いたしました通り、前住職の法事をみなさんと共につとめたいと存じます。よろしくお願ひ申し上げます。

発行

真宗仏光寺派 専念山 **西雲寺**

住職 護城一寿

筆頭総代 鈴木春夫

編集責任者 護城一哉

〒910-3523 福井市武周町5-2

電話 0776-97-2138

メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp

ホームページ <http://arukou.net/>

次世代の方、分家された方に!

お手元に2部届いた時には、ぜひご活用下さい。

みなさんの声 大募集!

原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。